研究の現場から

アイデンティティ論から「伝統の原理」の本質に迫る

道徳科学研究所 副所長
モラロジー研究推進プロジェクト リーダー
宮下 和大

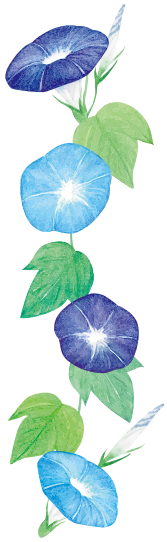
令和四年度のモラロジー研究推進プロジェクトでは、前年度に引き続いて「モラロジー研究の課題と展望」を共有しながら、モラロジーの本質的理解に迫るべく、年に四回の研究会（「モラロジー研究会」）を開催していきます。

七月二十日（水）の研究会では、最高道徳の五大原理の一つである「伝統の原理」の課題と展望を考察する一環として、アイデンティティ論の現代的展開をテーマに「伝統の原理」の本質に迫っていきたいと思います。

アイデンティティ（Identity）という言葉は、日本語では「自己同一性」等と翻訳される概念ですが、「自分は何者であるか」という問いを中軸に含む自己認識を意味する言葉であり、現在では広く一般的に理解され用いられている言葉でもあります。

「自分は何者であるか」という問いに、どう答えるか

伝統の原理に照らしてアイデンティティが問いている「自分は何者であるか」を考えてみると、それは「家の伝統」「国の伝統」「精神的伝統」（および準伝統）に根本的な系譜を持つ存在として、自己を見つめるということになるかと思います。

他方で、現代の家族が抱えるさまざまな問題、国家をまたいだ人の移動によるナショナルアイデンティティの揺らぎ、地縁や血縁を基軸としていた共同体が多様な人々の寄り集まるグローバルなコミュニティへと変容しつつあることなど、「自分は何者であるか」という問いにどう答え、自己をどのような存在として認識するかが大きく問われている時代でもあります。現代のアイデンティティ論が投げかけているこうした問いを通じて、モラロジーの「伝統の原理」の本質に迫ろうとするのが、七月の研究会の趣旨になります。

研究会では道科研のメンバーである大野正英、木下城康、アブドゥラシィティ アブドゥラティフの三名がそれぞれ異なる視点からアイデンティティについて発表を行ったうえで、最高道徳の「伝統の原理」の課題と展望を考察して共有していきたいと思います。